

【氏名】 増田都希

【所属大学院】（助成決定時） 一橋大学

【研究題目】 18世紀フランスにおける作法書とふるまいの規範

【研究の目的】

十七、十八世紀フランスは、これまで作法書の対象読者とは見なされていなかった地方貴族や都市の上層第三身分に向けた作法書や、より下層を対象とした廉価本の作法書が広く流布する時代である。この新しい現象を前に、作法とは何か（社交界の慣例的な行動様式を規定するものか、より広く民衆層をも含んだ社会における義務か）、作法とは学習可能か（民衆も適切なふるまいを習得できるのか）、作法とは心にもないことを言ったり、したりする虚偽の行為か（道徳的に善か悪か）という議論がさかんになされた時代である。本研究はこれら作法書の言説を分析することで、上述の議論に対する諸回答を明らかにすることを目的としている。また十八世紀において、一種の生物としての人間が博物学や医学、生理学的見地から解明されていった一方で、他の動植物とは異なる社会的・道徳的生物としての人間の探求も進められた。作法書は、まさにこの二つの視点が交錯した場であり、当時の人間についての知を集結しながら理想的な社会的人間像が模索された。この理想像を捉えることも本研究の目指すところである。

【研究の内容・方法】

上述の目的を果たすために、本研究では作法論において長年の議論の対象であった「内面と外見の溝」という問題に着目する。作法論では、作法の実践によって外観に表出された身振りは実践者の内面を忠実に反映すべき、という道徳的要請が常にあり、これが満たされないときに外見と内面の間に溝が生じる。この原則に対して、十八世紀には二つの立場が示された。一つは、内面と外見の一致という原則そのものに異論を唱えた立場である。彼らは虚偽との理由から作法を道徳的悪であると見なすことを本末転倒と指摘し、社会道徳的秩序の維持という作法の本来の有用性に注目すべきと唱えた人びとである。この見解についてはすでに研究者によって指摘されているが、本研究では、あくまでも内面と外見の一致を求めるというもう一方の立場に注目し、この思想的背景の解明を目指す。これまで人間は原罪を背負い、人間自体には向上する能力がない／乏しいとの考えが支配的だったが、とりわけ十八世紀後半には教育の可能性に期待が高まる。これによって、魂そのものを改造し、他者を尊重するとともに愛し、その敬意と好意を適切なかたちで表現できる作法を必要としないほど完璧な社交的人間の養成を目指す動きが現れてくる。つまり、これまでには醜さや暴力的な動物性が潜む人間の内面をそのまま露出すれば他者との間に諍いが起こるため、作法によって外見を繕うことが求められたのだが、このような理想的人間は自らの心や徳の命じるままに行動しさえすれば良いわけだから、内面と外見に一切の乖

離のないふるまいが自然と生まれる。この第二の立場は【研究の目的】で述べたように、作法書を人間探求の二つの視点の交差点と捉え、作法書の言説を他の領域の言説と比較・検討することで一層明らかになる。これまで多数の批判を受けながらも、今なお作法研究の基礎にある N. エリアスの研究に倣い、近世フランスのふるまいの研究の多くは作法書を主要コーパスとしている。上述の理由から、本研究では一見すると作法書とは無関係に見えるが、同じく人間の「内面と外見」に関心を向けた他の領域の言説も検討の対象とすることで、新たな展望を目指す。

【結論・考察】

M. フーコーが十九世紀に「異常者」と呼ばれることになる人びとを三つのカテゴリに分類しているが、その一つが「矯正不可能者」、すなわち作法書の規定するような規範に即したふるまいのできない人びとである。十八世紀は、このような人びとが未だ「異常者」のレッテルを貼られておらず、しかし同時にレッテルを貼られる素地が準備された時代である。一方で、良好な人間関係に基づく社会の安寧秩序を乱す者を、王権をもってしてでも隔離・排除する動きがあったことはよく知られているが、他方では人間の自己改善能力に期待し、人びとを矯正しようとする希望とそれへの取り組みがなされていたことを作法書ははっきりと示している。その際に十八世紀の人びとが標榜したのは、個人の幸福を追求と、さまざまな経済・職業・文化的背景を異にする人びとから構成される社会という集団の利益への貢献を両立する人間であり、これが理想的な社会的人間として提示されている。この理想像の実現を目指す大きなうねりは、道徳のみならず、医学、生理学、博物学、経済、政治などのさまざまな分野の言説から捉えられるように思われる。今後も、作法書の分析を主軸に据えつつ、より広い視点からこの理想像の解明に取り組みたい。